

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(85)

小高い山の頂上に立ったときの爽やかさや雄大な眺め、何か一端の者になったような開放感なんかは、幼児の頃から心得ていました。生家の近くからは五葉山を眺めることはできませんでした。

小学校に通うようになって、学校周辺から五葉山が見られることを教わりました。ただ「あれ!」と指さされただけなので、初冬にいち早く冠雪する山を勝手にイメージしていたところ、近年に至ってとんでもない間違いと知りました。そもそも、「山」の形態に対する概念がいかげん

で、絵本などから得られる格好良い山を基にしていたのです。気仙には、麓が険しく頂上が平坦という形の山が至るところにあります。「種山ヶ原」がその典型かと思えますが、これを「隆起平原」とか名付けているようです。それと、峰が横に長くのびている山、これは「長嶺」(ながね)と言っています。これも諸処にみられます。

平成の初め頃、水沢方面から来られた下有住小学校の校長さんが、真っ向に眺められる長嶺山(ほつし)が珍しいといつて写生の

テーマに据えておられました。地元の絵描きさんたちの画材にはなることは先ずありません。しかし、これも隆起平原で、その典型が「五葉山」なのです。高等小学校を卒業し

1シですから、双眼鏡の狙い所さえ定まらずでした。沖出しする漁師にとつて五葉山は、百沖の指標が「五葉つぶし」という話を初めて聞きました。戦後、大船渡で暮ら

しなれないのも恐ろしいの故でしょう。要するに五葉山は信仰にふさわしい山なのです。上有住葉山に伝わる「阿弥陀像」は、愛染・薬師・虚空像等とともに堂々祀られた唯一残った現存仏として知られていますが、その因果は謎のままです。とにかく、得体の

得体の知れない山

大船渡市大船渡町 紺野 矩男

です。海軍に志願。程なく終戦で、最後の任務は函館港でした。そこへ向かう途中は機雷の危険を覚悟して、

すようになってから、も、五葉山のイメージはあやふやのまま過ぎました。この地で教わった五葉山は、市内各所の電波塔、上有住大洞の箱根峠と回つてみて、この超巨大な長嶺山の全容を視界におさめることは不可能なのだといふ結論を得たのです。写真におさめるなんてとんでもない。絵描きさん達が画材と

イメージ

社の上官が「確か五葉山神社の鳥居が見えるはずだから、お前も拝め」と言ってくれました。また正確とはいえないと教わったのです。「黒岩」とか「前山」な

残念ながら、かく言う筆者はこの山の頂上に立つ機会をとうとう得ずじまいです。【執筆者プロフィール】一九二八年生まれ、住田町下有住出身。大船渡市大船渡町在住。共和印刷代表。現在、「気仙三十三観音」の続編「気仙三十六騎写真集」を編集集中。



大窪山からみた五葉山(長嶺)